

# ながれみず

林 一 道

「師僧急逝し俄に蓮華淨國の聚に加はる  
秦靈忌を了へて師が文机に一紙をみて」

常に動く水は清けれ人も亦こ

書きつくるまゝ生涯終へたり。

師の心我はつぎたり流水の

清き心を心になしてむ。

「シソウシススグ カヘレ」

常日頃體よわしき聞きしかご

電文みては涙出でこず。

「急電に接し闇黒の夜に行く我」

走り行く闇き車窓に顔よせて

師父を思ひぬ、涙流しぬ。

鷗飛ぶ瀬戸の美海も暗かりき

師のみまかりて已に在さず。

船頭立ちて騒潮みつむれば

沈み行きなむ沈み行かなむ。

眞なるか師父は逝きしこ文みれど

皐月の光明るく照るに。

「大松同じく立てり松籟又聞ゆ」

手をこれぎにぎりしめれど

温きおほえもあらずゆるき香のか

師は逝きて冷き屍凭りつれど

歸りたるかこ答へ給はず。

師は未だ他所に行きたるまゝにして

やがてきこゆる下駄の音をまつ。

「餘光遍く照して人心教化す」

方寸の御箱に入りし師なれども

心の響き十方を化す。

「人去りて靜寂又一入」

叱られて御堂の裏に泣きけるに

叱りし師父は早已に逝く。

法の灯の搖ぐみ堂に坐しあれば

師父の呼び給ふ心地してたつ。

法の灯は常にかゝけて明けく

くらぎ闇路を我は照さむ。